古本『貞元録』に入蔵された三種の『木槵經』について

青 木 進

はじめに

成立後まもなく日本に伝来した書に基づく『貞元新定釋教目録』⁽¹⁾(以下、古本『貞元録』とする。)の、七寺本(以下、七寺本『貞元録』とする。)の入蔵録に『木槵經』を求めると、入蔵録上には『新訳木槵經』と『木患子經』が、入蔵録下に失訳『木槵子經』が記され、計三種の『木槵經』が記載されている。

ところが、『大正新脩大蔵經』(以下、『大正蔵』とする)に所収の『貞元録』(大正蔵本『貞元録』とする。)の入蔵録上に『新訳木槵經』⁽²⁾、入蔵録下に失訳『木槵子經』⁽³⁾と計二種の『木槵經』が記載されるのみである。『大正蔵』には、第十七卷に『仏説木槵子經』⁽⁴⁾が一本のみ収録され、その脚注には不空訳の異訳本が対校に用いられていることがわかる。

本発表では、『木槵子經』が古本『貞元録』では三本記載され、大正蔵本『貞元録』の入蔵録には二本記載され、また

『大正蔵』では一本のみ収録されることについて考察する。

なお、本発表においては総称として『木槵經』を用いる。

一．『木槵經』について

『木槵經』は、仏陀が難国の波瑠璃王の求めに応じ、木槵子の実一〇八個を貫いた数珠を常に身につけ、仏法僧の三宝を称賛すること実に実を一個繰り、これを百万遍繰り返すならば、その功德として百八の煩惱を滅し、涅槃に到達することができる⁽⁵⁾と説く經典である。

『二十五種蔵經対照考釈』⁽⁶⁾によれば、失訳『木槵經』は二五種すべての版本に納められ、不空訳を収録する版本は僅かに五本のみである。『大正蔵』の場合は第十七卷に東晋失訳の『佛説木槵子經』のみを収録し、不空訳は収録していない。

一方で写本は仁和寺蔵『三十帖冊子』の十七帖に不空訳『木槵經』があり、この本は『大正蔵』で異本の一つとして対校に用いられている。また、大東急文庫には不空訳『木槵

經^⑥」が蔵されており、『日本現存八種一切經対照目録^⑦』に示されているように、平安時代から鎌倉時代にかけて書写された古写本が金剛寺、興聖寺、石山寺、新宮寺に一本ずつ所蔵され、七寺には失訳と不空訳が三本所蔵される。

二、入蔵録における『木槵經』について

經録での『木槵經』の初見は、隋の法經撰の『衆經目錄』であり、開元十八年（七三〇年）に成立した『開元釈教録』（以下、『開元録』とする。）巻二十の入蔵録下には東晋代失訳の小乗經典の一つとして記載される。

一方、不空訳の『木槵經^⑧』は『大唐貞元統開元釈教録』巻三の「經論及念誦法」が初見となる。不空訳は經典名に「子」の字を欠くが、失訳でも「子」を欠く場合がある。この「子」の有無に関する説明は少なくとも入蔵録には見られない^⑩。

さて、貞元十六年（八〇〇年）に成立した貞元録では失訳と不空訳の『木槵經』が入蔵されるが、大正蔵本『貞元録』巻二十九の入蔵録上には不空訳『新訳木槵經』、『貞元録』巻三十の入蔵録下に失訳『木槵子經』が記載され、七寺本『貞元録』の入蔵録上では、『木患子經』と不空訳『新譯木槵經』、入蔵録下に失訳『木槵子經』が記載されている。

七寺本『貞元録』の入蔵録で、『木患子經』の經名が大正蔵本『貞元録』に見られない点については宮林昭彦氏による

解題^⑪で指摘されている。

それによればそれぞれの入蔵録上の巻首には収録部巻数の記述があるが、七寺本と高麗版では大乘經の部巻数に四十五部三十巻の相異が認められるとし、さらに『入蔵録』の經典名を数えると七寺本が六四〇部、高麗版が六三八部となり、その七寺本六四〇部の内、『新訳大虚空藏菩薩所問經』『木患子經』『文殊師利菩薩六字呪功能法』『大乘造像功德經』『金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌』『慈仁問八千種好經』の六部が高麗本に見られないと指摘されている。

改めて七寺本『貞元録』の入蔵録上の二本の『木槵經』を見てみると、この二本は「三十六經同帙」とされるが、記載された經典の実数は三十七經である。この三十七經の内に余剰の一本を求めるとすると、宮林氏が指摘した『木患子經』ではないかとすぐに考え至る。

先に宮林氏が挙げられた高麗本に見られないとする六本の經典のうち、『文殊師利菩薩六字咒功能法』も、これと同帙とされる經典の巻数が実数と異なる

この經典は十五經二十八卷三帙と括られる中の一本であるが、その実数は十六經二十九卷と一經一卷多い。法勝寺本などとの対校を見ると、『文殊師利菩薩六字咒功能法』には対校が付されているが、隣に記載された『六字神呪經』が無点となっている。

この經典の場合には詳しい注記がある。『文殊師利菩薩六字咒効能法』の經典名の真下に「法本有之」と記され、底本に無く法勝寺本にのみ記載があったようである。さらに『六字神呪經』には「此□經ハ同經也」と、一字欠損しているが、左方に記された注記から、『文殊師利菩薩六字咒効能法』と『六字神呪經』が同本であることが窺え、經名が異なる經典を並記して注記がなされる場合があると考えられる。

改めて『木槵經』について考えてみる。七寺本『貞元録』の入蔵録の対校を見ると、『木患子經』には右点が施されているものの、『新訳木槵經』は無点で対校されていない。つまり七寺本『貞元録』の底本にはあるものの、『新訳木槵經』は対校本に無かったと考えられる。しかし、この二經について説明する注記は見られず、両方とも紙数が記載されているため、異訳の並記と見るのが妥当であろう。

三、三種の『木槵經』について

国際仏教学大学院大学では学術フロンティア推進事業「奈良平安古写經研究拠点の形成」において古写經調査を行っており、その調査で七寺には『貞元録』に記載された通り三種の『木槵經』が現存することが分かった。

七寺の三種の『木槵經』は何れも平安時代後期書写の卷子本である。この三本の内容はほぼ同じで、大きな違いは經典

名と訳者名、冒頭部分の三箇所に絞られる。

訳者名が無く經名を『木槵子經』とする本は「入蔵録下」に収録された失訳の『木槵子經』と考えられるが、仮に七寺Aとした。訳者名を「大興善寺三蔵沙門大廣智不空奉詔譯」とする『木槵經』は訳者名と冒頭部分はここで比較した他の二本と一つも一致しないが、『大正蔵』の校異を見ると、『三十帖冊子』と經典名、訳者名、冒頭が一致することが分かる。これを仮に七寺Bとする。訳者名を「不空訳」と記した『新訳木槵經』とする經題の本は外題を「新譯木槵經」とするが内題と尾題は「新譯木槵子經」、「新譯木患子經」である。この本を七寺C本とした。

七寺Bと七寺Cはいずれも不空訳であると考えられ、入蔵録上に記された『新訳木槵經』と『木患子經』にどれが相当するか決し難いが、訳者名からすると、七寺B本が『新訳木槵經』に相当し、七寺C本がその尾題から『木患子經』に相当すると考えられる。

七寺の『木槵經』から見ると、失訳と二種の不空訳の、計三種が現存していることになる。

七寺では『貞元録』の入蔵録通りに、三種の『木槵經』が書写されているが、大正蔵本『貞元録』の入蔵録には失訳と不空訳との二種の『木槵經』が記載されながら、一本のみ所収する。実は版本大蔵經の多くは失訳のみを所収し、不空訳

をも所収する版本は少ない。その理由は『高麗国新雕大蔵校正別録』巻第三十に記述が参考になる。それによれば、不空訳と失訳本を検討した結果、不空訳は異訳とは考えられず、同本重出の可能性があるため載録しなかったとしている。

しかし、『大正蔵』の失訳『佛説木槵子經』の校異を見ると、わずか三十三行の經典に三十九カ所の注記が付され、異本として対校に用いた不空訳の『三十帖冊子』所収本との異同は十三カ所にのぼる。この数からすると失訳と不空訳を同本重出とみなして、『木槵經』を一本のみとするのは若干強引ではないだろうか。

『開元錄』の入蔵録では「槵」の字が異なる点が指摘されていることから、『開元錄』が編纂される以前に『木槵經』には幾つかの異名があったと見られる。訳者名と經典名が異なり、本文も若干異なる幾つかの系統があったと考えられるのではないだろうか。その系統が認められ、『貞元錄』では三種とも入蔵されたのではないだろうか。

より詳しく検討するためには、『三十帖冊子』本と現存する金剛寺本等の古写經本とを加えて比較検討することが必要であり、これらの諸本を元にして三種の『木槵經』について明らかにしたいと考えるがこれは今後の課題としたい。

Ⅰ 塚本善隆「日本に傳存する古本貞元錄について」(『神田喜一

古本『貞元錄』に入蔵された三種の『木槵經』について(青木

郎還曆記念論文集』昭和三十二年。同刊行会。『塚本善隆著作集』第三巻所収 大東出版社 昭和五十年)

2 大正蔵第五十五卷一〇三〇頁中段

3 大正蔵第五十五卷一〇四一頁下段

4 大正蔵第十七卷七二六頁上段

5 大正蔵第二十卷一一〇頁下段二二行目

6 蔡運辰『二十五種藏經目錄對照考釈』(新文豐出版、一九八三年)

7 國際仏教学大学院大学學術フロンティア実行委員会編『日本現存八種一切対照目錄』(同、委員会、二〇〇六年)

8 久安五年写。神護寺一切經の一本である。

9 『代宗朝贈司空大辨正廣智三藏和上表制集』卷第三の「三朝所翻經請入目錄流行表一首」には『木槵經』は見られない。この問題は別の機会に譲る。

10 『觀念阿弥陀仏相海三昧功德法門經』では「又如木槵經說。」と引用していることから、『貞元錄』が編纂される以前から『木槵經』という呼称があったことが伺える。

11 宮林昭彦『貞元新定釈教目錄』巻第二十九・卷第三十解題(牧田諦亮監・落合俊典編 七寺古逸經典研究叢書 第六卷『中國・日本經典章疏目錄』大東出版社、一九九八年)

(キード) 金剛寺一切經、七寺一切經、貞元錄、木槵子經、木槵經

(國際仏教学大学院大学學術フロンティア研究員)

requirements than the usual Śīla required by monks. It will be argued, therefore, that the *Ugraparipṛcchā* and *Jingxing ping* of the *Huayan jing* attempt to define the monastic bodhisattva as a sterner, more disciplined monk.

98. Hitherto Unknown Manuscripts of the *Wuwang-jing* (五王經) from Japan

HAYASHIDERA Shōshun

In this paper, first of all, I clarify differences between a hitherto unknown version of the *Wuwang-jing* found among old Buddhist manuscripts in Japan and the printed version. There are three differences; 1) the sequence of eight kinds of suffering (*dukkha*), 2) terminology used, and 3) brevity or details of sentences in the same paragraphs.

Secondly, I examine which versions of the *Wuwang-jing* were quoted in Buddhist writings in both China and Japan, and found that there were seven occurrences of quotations of the printed version and only one of the manuscript version.

Thirdly, in spite of the above-mentioned differences, a close relationship is presupposed because of the high portion of identical sentences. As far as this is concerned, there are two possibilities. One is to assume that the manuscript version was composed by deleting some sentences from the printed version. Another is quite the opposite, i.e., the printed version was composed by adding some sentences to the manuscript version. Internal textual evidence suggests that the second possibility is more likely. In order to arrive at a definitive conclusion, however, a further and closer examination shall be needed.

99. On the Three Versions of the *Muhuan jing* Recorded in the Old *Zhenyuan lu*

AOKI Susumu

The old manuscript of the *Zhenyuan lu* 古本『貞元錄』preserved in the Nanatsu-dera collection, which represents a recension based on the text transmitted to Japan immediately after its compilation, records three versions of the *Muhuan jing* 木棹經. On the other hand, the Taishō recension

of the *Zhenyuan lu* registers only two versions of the *Muhuan jing*. Furthermore, volume 17 of the Taishō Canon contains only one text entitled *Muhuan jing*.

It would appear that Amoghavajra's translation was considered a similar rendering of the same text, which was not essentially different from the recension attributed to the unknown translator and therefore not used as the basic text of the printed versions.

The Taishō edition of the text, the *Fo shuo muhuan jing* 佛說木槵子經, which also adopts the recension attributed to an unknown translator, relies on the text of the Korean Canon, and its footnotes collate it with the variant readings found in the printed versions as well as in Amoghavajra's translation of the *Sanjūjō sasshi* 三十帖冊子. One is, however, struck by the fact that for a short text consisting of only 33 lines in the Taishō Canon, we have no less than 39 footnotes and 13 *variae lectiones* different from the *Sanjūjō sasshi* version. It would thus seem unreasonable to regard the rendering attributed to the unknown translator and Amoghavajra's translation as being similar or identical renderings of the same text.

In this paper, I examine the three versions of the *Muhuan jing* recorded in the old *Zhenyuan lu* on the basis of the three Nanatsu-dera manuscripts of the text, copied in the Heian Period.

100. On the Texts of the *Dafo ding bie xingfa* 大佛頂別行法

LIN Min

The text, whose complete title is *Da fo ding rulai fangguang xidanduo bandanluo dashenli dushe yiqie zhouwang tuoluoni jing da weide zuisheng jinlun sanmei zhou pin diyi* 大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切咒王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧咒品第一, is included in volume 19 of the Taishō Canon (No. 947). This version is based on a manuscript which was copied in year 3 of the Enkyū Era 延久 (1071 C.E.) and belongs to the Sanmitsu Collection 三密藏 of Tō-ji 東寺.

The traditional catalogues of Buddhist scriptures contain no reference to the *Dafo ding bie xingfa*. We find, however, a total of 14 manuscripts of the text in the Dunhuang collections. They are complete or partial texts which